

患者会交流会に関するアンケート 分析報告書

- 2026年7月5日 -

Zoom 交流会・リアル交流会・未参加者の声から見える
参加価値と今後の改善課題

項目	内容
回答数	113 件
対象	患者本人、家族・パートナー
主な分析軸	交流会参加経験、満足度、参加理由、未参加理由、今後知りたいテーマ、自由記述
作成日	2026年6月25日

1. エグゼクティブサマリー

本アンケートでは、患者本人・家族等 113 件の回答から、食がんリングスの交流会がもたらしている価値と、今後の参加促進に向けた課題を整理した。全体として、交流会は「同じ立場の人と話せる」「治療経験を共有できる」「安心感が得られる」という点で高い評価を得ている。一方、未参加者には関心を持つ層が多く、日程・開催場所・初参加への不安・Zoom への苦手意識が参加の壁になっている。

- 回答者 113 名のうち、患者本人は 102 名（90.3%）、家族・パートナーは 11 名（9.7%）。
- 交流会未参加者は 51 名（45.1%）。一方で、未参加者向け設問の有効回答では「ぜひ参加してみたい」「少し興味がある」が 47 件で、関心層が大半を占めた。
- リアル交流会の満足度は「たいへん良かった」「良かった」が 43 件/47 件（91.5%）。直接会って話す価値が非常に高い。
- Zoom 交流会の満足度は「たいへん良かった」「良かった」が 29 件/37 件（78.4%）。全国の患者とつながれる価値がある一方、テーマ設定やグループ分けへの改善要望が見られた。
- 今後知りたいテーマは「再発への不安」「食事」「手術後の生活」「後遺症」が上位であり、術後生活・不安軽減・日常生活支援へのニーズが強い。

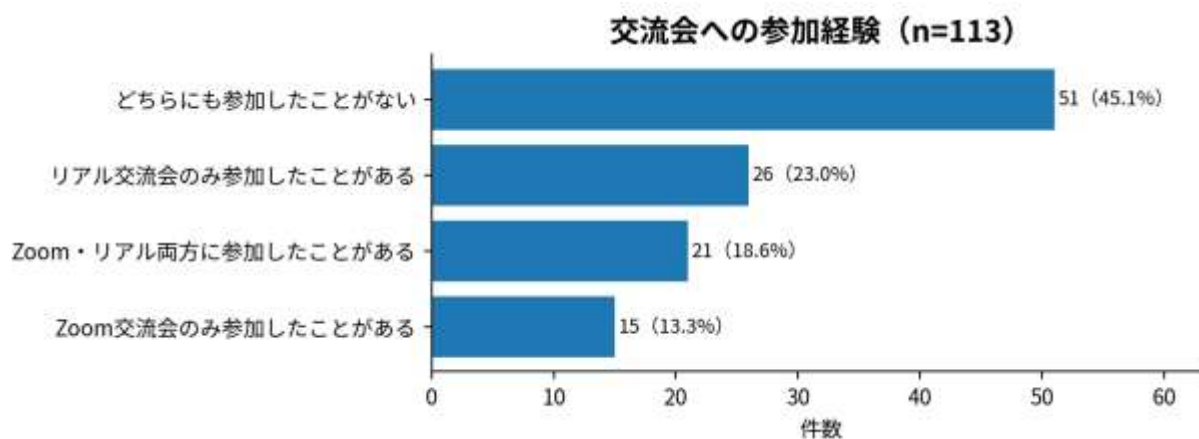


図1 交流会への参加経験

2. 回答者属性

回答者の中心は患者本人であり、年代は60代が最も多い。地域は東京都・神奈川県・大阪府・兵庫県など都市部の回答が多い一方、北海道、東北、北陸、九州などからの回答もあり、オンラインを含めた全国型の患者会としての広がりが確認できる。

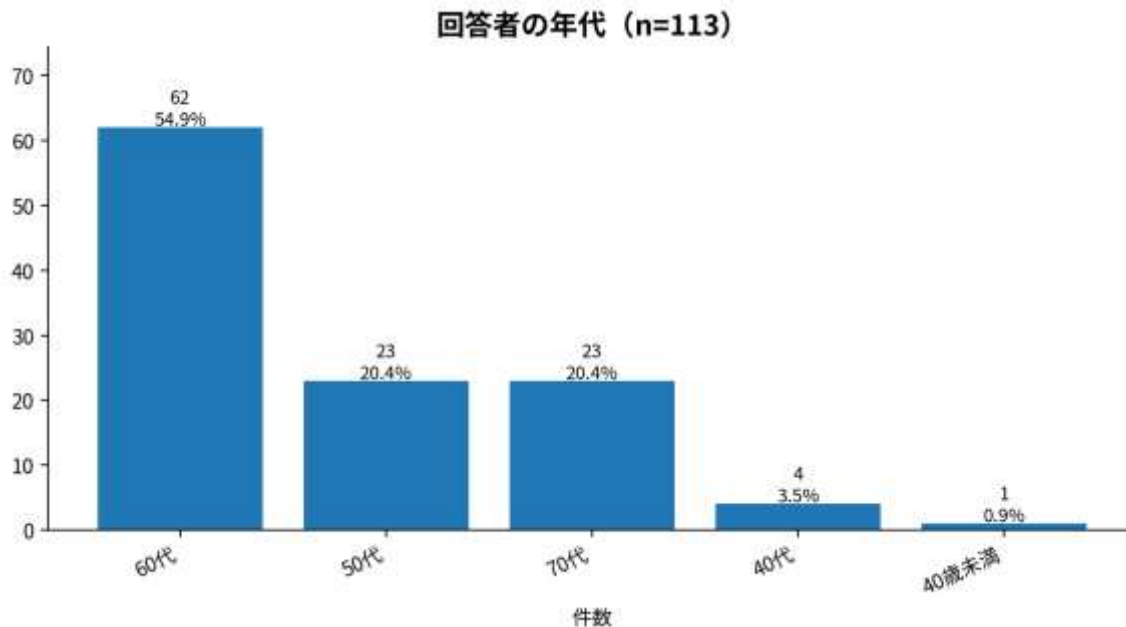


図2 回答者の年代

属性	件数	割合
患者本人	102	90.3%
家族・パートナー	11	9.7%
60代	62	54.9%
50代	23	20.4%
70代	23	20.4%

地域別では、東京都 29 件、神奈川県 16 件、大阪府 15 件、兵庫県 9 件が上位であった。リアル交流会を開催する地域の近隣からの回答が多く、開催地域が参加・回答行動に影響している可能性がある。

地域	件数	割合
東京都	29	25.7%
神奈川県	16	14.2%
大阪府	15	13.3%
兵庫県	9	8.0%
埼玉県	7	6.2%
千葉県	6	5.3%
京都府	6	5.3%
広島県	3	2.7%
愛知県	3	2.7%
北海道	2	1.8%

3. Zoom 交流会の評価

Zoom 交流会は、地理的制約を超えて参加できる点が大きな強みである。参加して良かったことでは「同じ立場の人の話が聞けた」が最も多く、次いで「治療や生活の参考になった」「全国の患者とつながれた」が続いた。

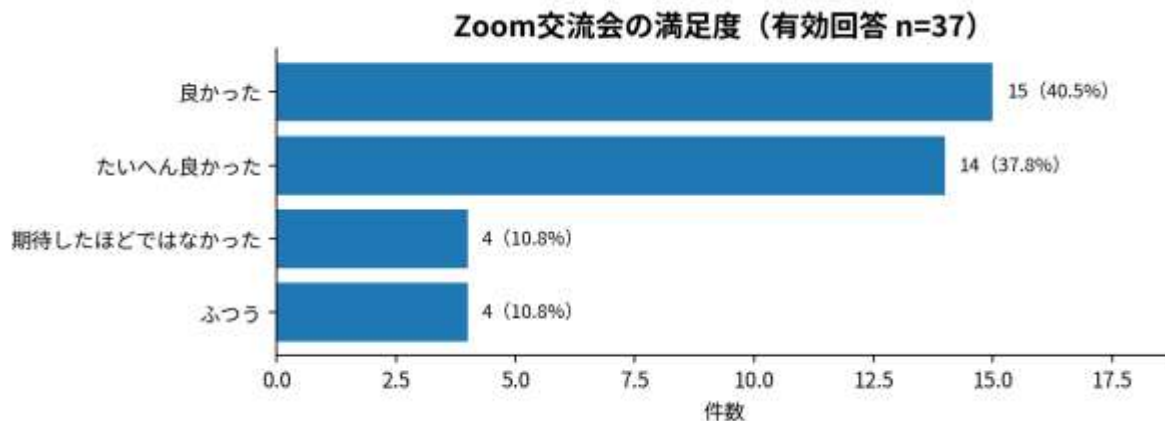


図3 Zoom 交流会の満足度

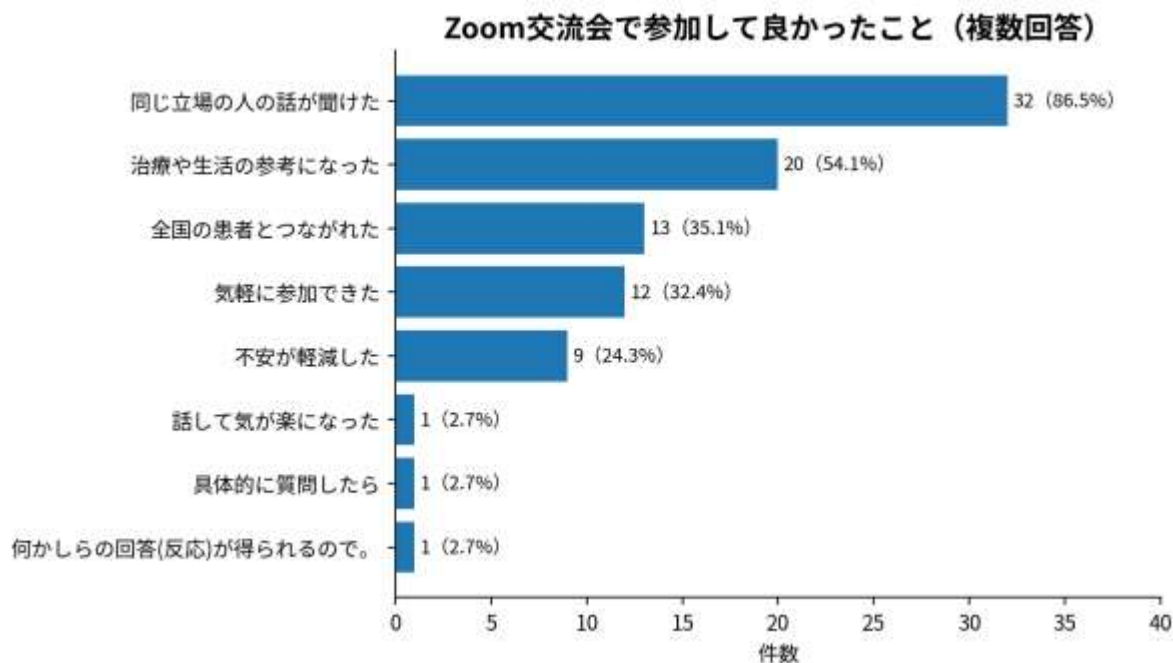


図4 Zoom 交流会で参加して良かったこと

Zoom 交流会の今後の課題としては、開催時間、テーマ設定、グループ分け、発言しづらさが挙げられた。特に食道がんでは、手術・化学放射線・内視鏡治療など治療方法の違いによって経験や困りごとが大きく異なるため、「参加してみないと自分に近い経験者がいるかわからない」という不安が参加価値を左右している。

改善要望	件数
特になし	15
開催時間	8
テーマ設定	7
グループ分け	6
発言しづらい	6
開催曜日	5

4. リアル交流会の評価

リアル交流会は満足度が特に高く、患者同士が直接会って話せること、治療経験を共有できること、医療者の話が聞けることが評価されている。オンラインでは得にくい安心感や仲間意識が、リアル交流会の重要な価値になっている。

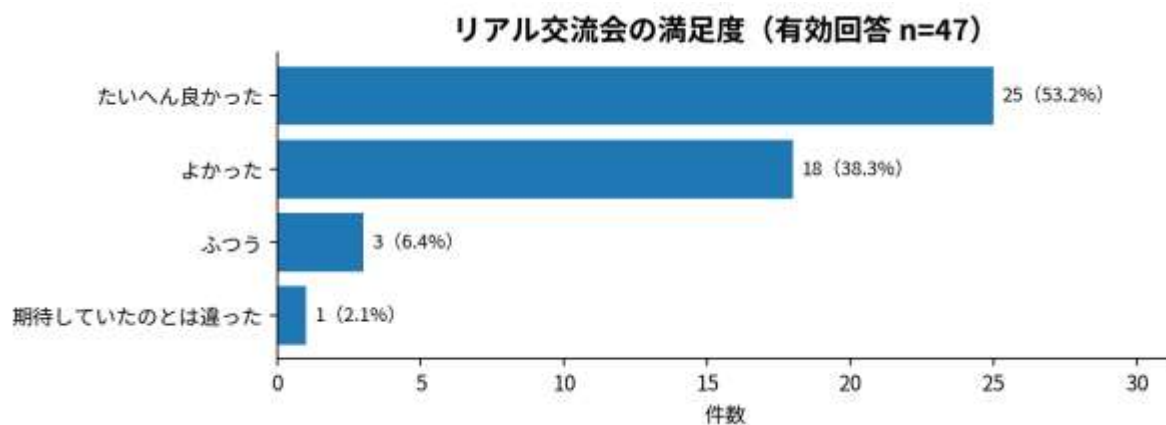


図5 リアル交流会の満足度

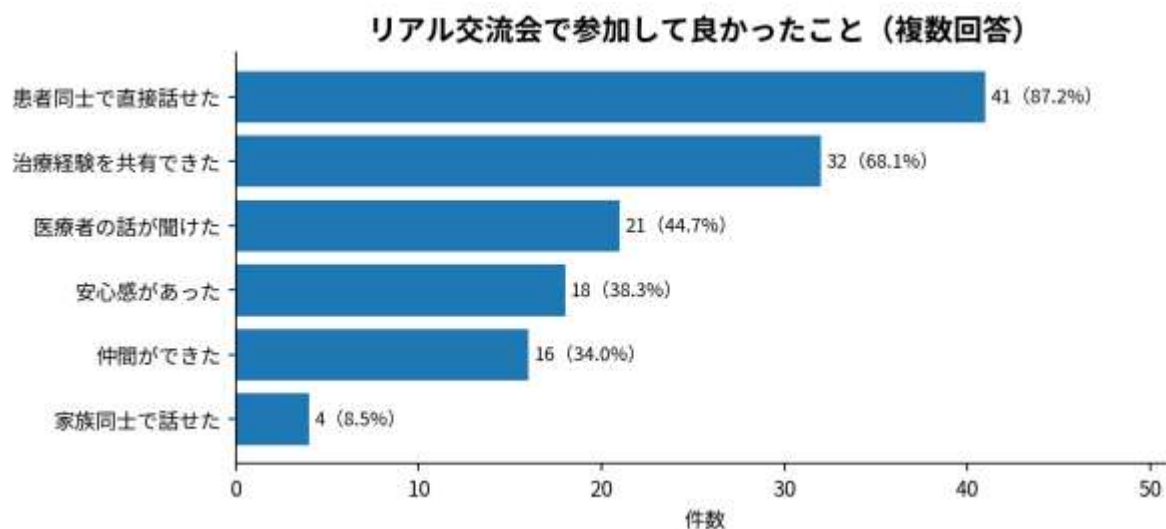


図6 リアル交流会で参加して良かったこと

改善要望では「特になし」が最も多い一方、開催場所、グループ分け、内容への要望が見られた。自由記述では、治療方法別・関心テーマ別のグループ分け、駅近会場、二次会や自由交流の時間を評価する声が目立った。

改善要望	件数
特になし	26
開催場所	8
グループ分け	6
内容	3
開催曜日	2
地方での開催を増やしてほしい。	1

5. 未参加者の関心と参加障壁

未参加者は 51 名と全体の約 45%を占めるが、未参加者向け設問では「ぜひ参加してみたい」「少し興味がある」が多く、潜在的な参加希望者は少なくない。参加していない理由は、日程、初参加への不安、開催場所の遠さ、Zoom が苦手、人前で話すのが苦手といった、内容そのものへの不満ではなく「参加の入口」に関する課題が中心であった。

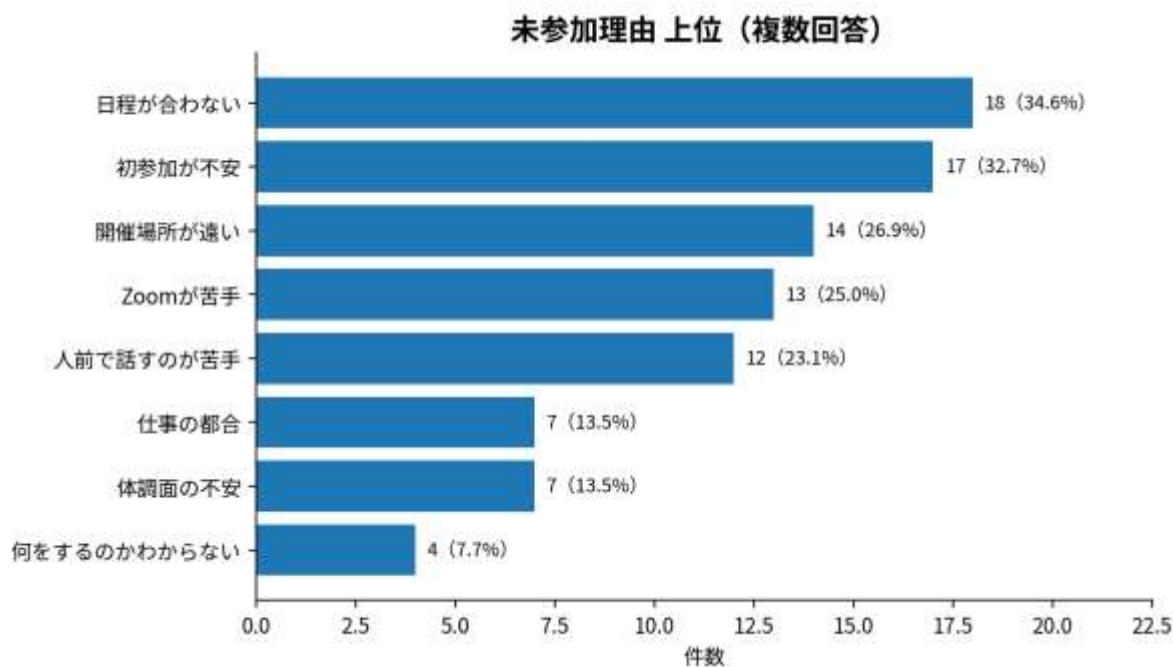


図7 未参加理由の上位

この結果から、未参加者対策では「交流会の中身を詳しく伝える」「初参加でも話さなくてよい選択肢を明示する」「聞くだけ参加を認める」「治療段階・テーマ別の小グループを設ける」など、心理的ハードルを下げる案内設計が有効と考えられる。

交流会への関心	件数	割合（有効回答内）
あまり興味がない	3	5.8%
少し興味がある	34	65.4%
ぜひ参加してみたい	13	25.0%
興味がない	2	3.8%

6. 今後知りたいテーマ

未参加者が参加するとしたら知りたいテーマでは、「再発への不安」「食事」「手術後の生活」「後遺症」が上位となった。これは、治療情報そのものだけでなく、治療後の生活、食べること、体調変化、不安との付き合い方に対するニーズが強いことを示している。

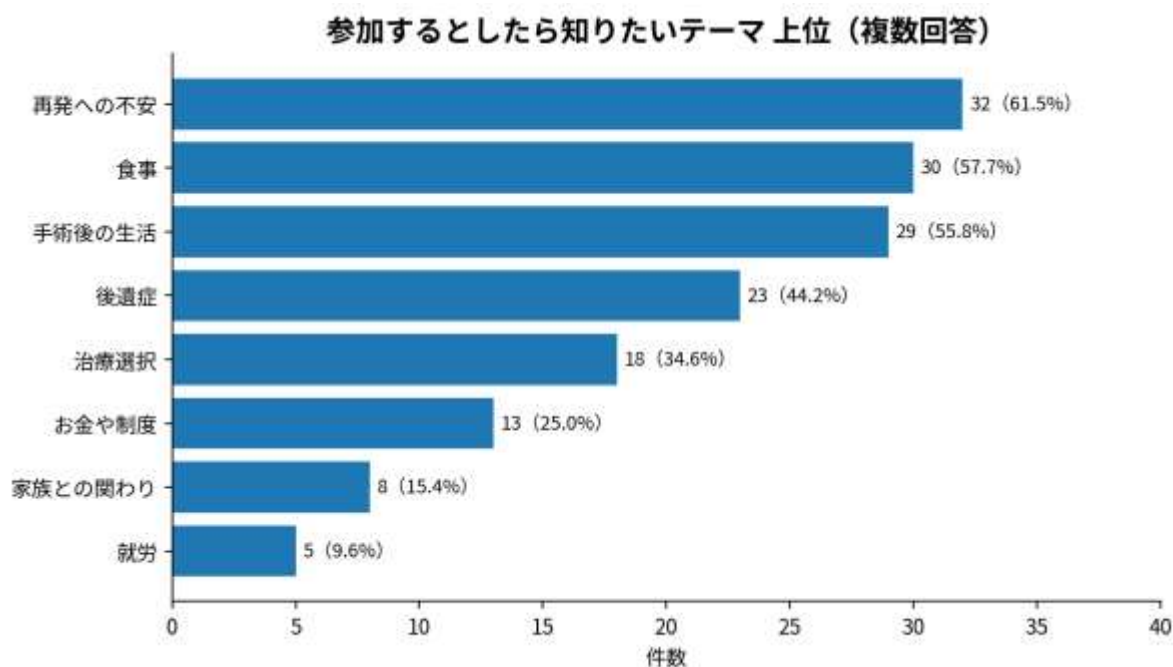


図8 今後知りたいテーマ

患者会としては、医療者による治療解説だけでは届きにくい「治療後の日常」「生活の工夫」「患者同士の経験知」を整理して提供することが、交流会の独自価値になる。特に食道がん術後は、嚥下、食事量、逆流、ダンピング、体重変化、再発不安など、生活と密接した課題が多く、テーマ別交流会との相性が高い。

7. 自由記述の分析

自由記述は、感謝や情報発信への評価、開催地域・アクセス、グループ分け・テーマ設定、初参加への不安、自由交流や二次会への期待などに分類できた。以下の分類は、記述内容をキーワードで機械的に整理したものであり、1つの記述が複数の分類に該当する場合がある。

自由記述から見える主な論点（機械的分類・重複あり）

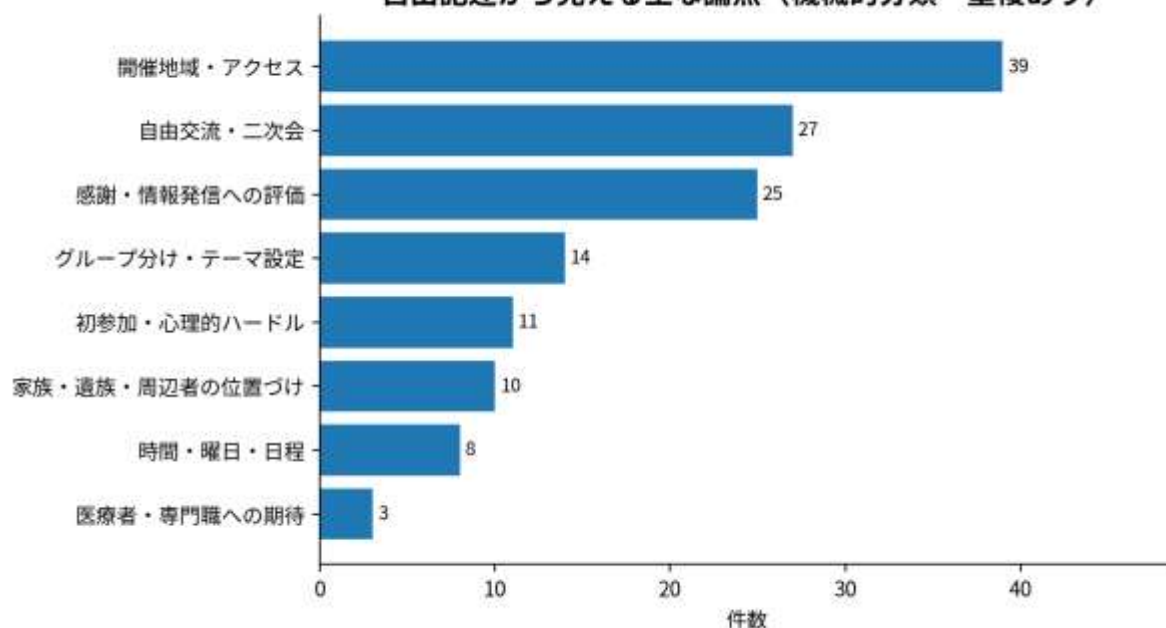


図9 自由記述から見える主な論点

分類	主な内容	件数（重複あり）
感謝・情報発信への評価	患者会活動、YouTube、情報提供への感謝。治療開始前・治療中の意思決定を支えたという声。	25
開催地域・アクセス	関西・大阪・兵庫・愛知など、地域開催や駅近会場への希望。	39
グループ分け・テーマ設定	治療方法別、関心テーマ別、参加目的別に話せる場への要望。	14
初参加・心理的ハードル	初参加の不安、人前で話すことへの抵抗、Zoomへの苦手意識。	11
自由交流・二次会	形式的な交流だけでなく、自由に深く話せる時間への期待。	27

8. 代表的な声（個人が特定されない範囲で要約・抜粋）

論点	代表的な声の要約
情報提供への感謝	治療を始めたばかりの時期に、患者会からの発信やYouTubeが情報収集・意思決定の助けになった。
参加ハードルの低下	女子会など、対象を絞った場があることで参加のハードルが下がった。
グループ分けの重要性	食道がんでも治療方法により経験が大きく異なるため、治療方法別に話せると参加価値が高まる。
リアル交流の価値	直接会って話すことで安心感があり、二次会のような自由交流の時間も有意義だった。
専門職への期待	医療者や看護師、栄養面に詳しい専門職が参加すると、生活上の疑問を相談しやすい。
未参加者の不安	興味はあるが、初参加の不安、日程、開催場所、Zoomへの苦手意識が参加を妨げている。

9. 考察：患者会活動としての意味

本アンケートから見える食がんリングスの交流会の価値は、単なる情報提供ではなく、「同じ病気を経験した人と出会い、自分の経験や不安を言葉にできる場」を提供している点にある。医療機関では得にくい生活実感、術後の工夫、迷いや不安の共有が、参加者に安心感をもたらしている。

一方で、参加経験者の満足度が高いほど、未参加者との間には見えない距離がある。未参加者は交流会に興味を持ちながらも、「何を話すのか」「自分が話せるのか」「場に入っていいのか」という不安を抱えている。したがって今後は、交流会の内容を充実させるだけでなく、参加前の案内文・申し込み導線・初参加者への説明を工夫することが重要である。

また、Zoom とリアルは代替関係ではなく補完関係にある。Zoom は全国から気軽に参加できる入口であり、リアルは深い安心感と関係性を生む場である。今後は、Zoom を入口、リアルを関係深化の場として設計し、両者を連動させることで患者会全体の参加継続につながる。

10. 全体初見

自由記述では、交流会への感謝、同じ立場の人と話せる価値、情報提供への期待が多く見られました。一方で、初参加のしづらさ、常連参加者との距離感、発言タイミング、治療方法やステージの違いによる話題の合いづらさも確認されました。リアル交流会では直接話せることへの評価が高く、Zoom 交流会では全国から参加できることや気軽さが評価されています。

11. まとめ

今回のアンケートから、食がんリングスの交流会は、参加者にとって「安心して話せる場」「治療経験を共有できる場」「孤立感をやわらげる場」として機能していることが確認できた。リアル交流会は直接会うことによる安心感が強く、Zoom 交流会は全国の患者がつながれる入口として有効である。

今後の鍵は、未参加者が持つ関心を実際の参加につなげることである。そのためには、初参加者への配慮、テーマの明確化、治療方法別のグループ設計、地域開催、専門職との連携が重要となる。交流会を単発のイベントではなく、患者・家族が治療前後の不安や生活課題を継続的に共有できる仕組みとして育てていくことが、患者会活動の価値をさらに高める。

本報告書は、今後の交流会運営、協力医療者・支援企業への説明、患者会活動の振り返り資料として活用いたします。